

令和 3 年 4 月 21 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02432

研究課題名(和文) 子どもの製作活動における発話と非認知的能力の発達に関する研究

研究課題名(英文) activation of utterance and non-cognitive abilities in children's activities

研究代表者

小林 俊介 (Kobayashi, Shunsuke)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：50292404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、造形・製作活動を通じた非認知的能力の活性化について、独自に開発したチャートによる観点別分析やクラス全体の活動を表で視覚的に表し、保育者間の異なる分析視点を共同で検討していくことで、非認知的能力を保育の中でどのように捉え育成を検討していけるのか、その具体的モデルを示したことが意義ある成果といえる。また、本研究でとりまとめた実践報告記録は、造形・製作活動の中に素朴な形で生起する乳幼児の遊びや表現の姿について記述を積み重ねており、幼稚園や保育園と大学・芸術(美術)専門家との共同実践研究を活性化させる上での参考に供し得るものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの製作活動の質や創造性と、それによって促される発話や非認知的能力の発達との相関について、非認知的能力を見取る5観点(安心、主体性、共同性、興味、創造性)を整理し、チャートによってその結果を可視化して保育者・研究者でそれを共同で検討する具体的なモデルを提示した。その結果、質の高い製作活動を促すことが子どもの発話や非認知的能力の発達にとって有効であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, regarding the activation of non-cognitive abilities through children's art activities, the analysis by viewpoint using an independently developed chart and the activities of the entire class are visually represented in a table, and different analysis viewpoints among childcare workers are shared. It can be said that it is a significant result to show a concrete model of how non-cognitive ability can be grasped and nurtured in childcare. In addition, the practice report records compiled in this study are accumulating descriptions of the play and expression of infants that occur in a simple form during children's art activities. It can be used as a reference material to activate joint practical research between nursery teachers and researchers / artists.

研究分野：美術教育

キーワード：非認知的能力 造形・製作活動 チャート 発話 見取り 子ども

### 1. 研究開始当初の背景

保育における造形・製作活動の有効性、就中その活動の質とその活動が育む具体的な諸能力に関しては、経験的には理解されているものの、最も解明が進んでいない研究領域のひとつであった。しかしながら、このたび改訂された幼稚園教育要領においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、すなわち幼児期の終わりまでに育むべき諸能力が明記された。加えて「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」、すなわち保育活動の検証とカリキュラムへのフィードバックが明記されており、その検証は不可欠であった。

一方、近年米国では造形・製作活動を含む多様な表現活動が 21 世紀のポスト工業化社会やイノベーションに対応できる創造性や社会的・行動的スキルを育むのではないかと注目されている (OECD 教育研究革新センター, 2016)。周知のように、この背景には幼児期における非認知能力、すなわち OECD などが提唱する社会的・行動的スキルの育成が、子どものその後の人生における社会的成功と密接に結び付いているという国際的な研究動向がある。

幼児教育(保育)において社会性や情意性を育てることの重要性は、近年、非認知的能力(社会情動的スキル)として盛んに論じられるようになった。周知のように、これはヘックマンによる「幼児教育の経済学」の提言によるところが大きい(ヘックマン/古草訳, 2015)。OECD では乳幼児期から児童期における社会情動的スキル、すなわち非認知的能力の育成が子どもの成長のみならず経済格差がもたらす個人間の格差を是正することに有効であるとしている(池田・宮本, 2015)。それは(a)一貫した思考・感情。行動のパターンに発現し、(b)フォーマルまたはインフォーマルな学習体験によって発達させることができ、(c)個人の一生を通じて社会、経済的成果に重要な能力を与えるような個人の能力であり、具体的には「目標の達成(忍耐力、自己抑制、目標への情熱)」「他者との協働(社交性、敬意、思いやり)」「情動の制御(自尊心、楽観性、自信)」といったスキルである。これは5つのパーソナリティ特性(外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性または神経症的傾向)いわゆる「ビッグ・ファイブ」とも関連している(OECD/無藤・秋田監訳, 2018, pp.52-53)。

このように子どもの主体的な活動を促す保育、遊びを主軸とした保育が子どもの諸能力を促すことが国内外の研究から明らかになってきており、国内でも特定の遊びの質的な研究が組織的に展開されるようになった。造形・製作活動との関連でいえば、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構による「砂場研究」(中間報告:2017年8月)は、砂場でおこる子どもの活動をいくつかのカテゴリに分類しながら検討しており、包括的な製作活動の研究の端緒として注目された。しかしながら、このような描画活動に限定されない幼児の造形的な製作活動全般に対応しながら、子どもの諸能力の発達との相関を包含するような本格的な研究は萌芽的なものであった。

### 2. 研究の目的

幼児教育(保育)においては造形・製作活動が極めて大きな比重を占めており、それが非認知的能力の育成にいかに関与し得るのかは興味ある問題である。近年では、橋本(2019)の研究などにみられるように、造形・美術教育の面からもこの問題に対するアプローチが行われるようになった。本研究は地域の幼稚園との共同研究によりこの問題に実践的に取り組んだものである。すなわち、造形・製作活動を主体とした研究協力園の保育実践事例の検討を通じて、創造性や社会情動的スキルの育成におけるその有効性について検討することが目的である。

ところで、質の高い造形・製作活動は非認知的能力に関わる行為や発話を促すと考えられる。保育内容にも規定されているように、発話を促すことは幼児教育(保育)において大きな領域を占めている。H.ガードナー(H.ガードナー/星訳, 1996)の古典的な研究にも見られるように、造形・製作活動に関する幼児の発話がいかなる資質・能力やパーソナリティと結び付いているのかは非認知的能力の育成と密接に関わる問題であり、本研究の一環として取り組んだ。

### 3. 研究の方法

曖昧になりがちな造形・製作活動の質について、またその活動によって促される非認知的能力の伸長について、具体的な指標を用いて見取りと評価を行なった。

具体的には、5つの観点(安心、興味・関心、主体性、協同性、創造性)を設けて省察を行い、チャートによって保育者・研究者間で評価を可視化しながら実践の改善を続ける方法である(下図)。この5観点は東北芸術工科大学(東北芸術工科大学, 2017)や同研究が参照するガードナーのMI理論における知能の区分、また幼稚園教育要領における「ほしい姿」を参考に、保育の現場における実践性を重視して定められている。製作活動を中心とした遊びにおける質と創造性や非認知的諸能力との相関を直接研究対象とすることが特色である。

これらの観点にはその下位の観点を示すキーワード(見取りの目安)が存在する。例えば、「創造性」の中には「つくる、見立てる、動かす、工夫、改善」などの下位の観点が存在し、これらを指標に子どもの遊びにおける発話や行動を分析する。これらの観点は今日生涯の学びを支える非認知的能力として注目される「興味」や「協同性」(仲間と協調して取り組む力)などの社会的・行動的スキル(忍耐力・社会性・自尊心など)<sup>7</sup>を含んでいる。また、「粘り強さ」

や「挑戦する気持ち」、また、いわゆる「レジリエンス」(立ち直る力・やり直す力)については「主体性」に含めて評価している。具体的な事例研究としては、創造的かつ協同的な遊びを促しやすい土粘土を中心に検討を行った。

上記のチャートは主に抽出児(S児、R児)に関して使用したが、別にクラス全体として生起

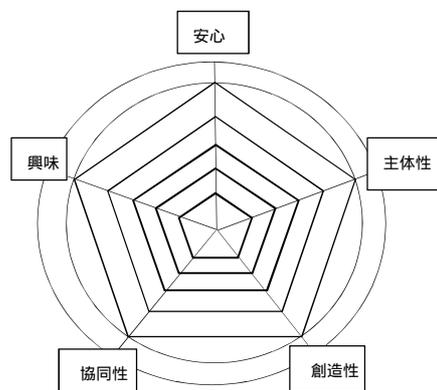


図 5 観点による遊びの評価のチャート

した出来事を記述するために、保育者の関与観察に加え、ビデオ記録などから参加したクラスの子ども全員の活動を時間とともに書き起こしたのが表を作成した。で人との関わりを示すなど、可視化の工夫をしている。

発話に関しては、研究協力園の造形物を中心に関連する発話を採取し、発話と造形物・製作活動の造形性との相関について、発話内容の要素として、「形容」「要素」「感情」「対人」などの要素を抽出し分析を行った。

#### 4. 研究成果

年度遊びの実践事例研究においては、「粘土に馴染む」「粘土を操作する」「粘土を造形する」という3段階のステップをふみながら、粘土を介した身体的・感性的コミュニケーションが行われ、粘土の魅力、粘土の「おもしろい」が共有され、子どもたちの満足感、達成感、自己肯定感、また協同性など、非認知的な能力が活性化されたことが確認できた。また研究を通じて、独自に開発したチャートによる観点別分析やクラス全体の活動を表で視覚的に表し、保育者間の異なる分析視点を共同で検討していくことで、非認知的能力を保育の中でどのように捉え育成を検討していけるのか、幼稚園や保育園と大学(研究者)とのコラボレーションの基盤となる具体的なモデルを示したことが意義ある成果と言える。

別に発話に関しては造形物に関するものを中心に上記のようにカテゴリ化による検討を行い、3歳児においては要素命名的な傾向が強いこと、またガードナーのいう「ドラマティスト」と「パターナー」、すなわち、物語性や対人指向の強い造形物と、造形それ自体に没頭し密度の高い造形物という二つの傾向があること、前者は抽出した発話内容の要素と造形造形物の要素の対応関係が強い、ということが確認された。また4歳児に関しては発話内容が充実し、「形容」「要素」「感情」「対人」に加え、造形物のはたらきである「機能」、子どもの思いや願いである「意思・主張・願望」というカテゴリの発話が増加する。全体として造形活動が活発で作品の複雑さや質が高い子どもは発話が多いことが確認された。

#### 文献

ヘックマン,J.J./古草秀子(訳)、2015、『幼児教育の経済学』、東洋経済新報社  
池迫浩子・宮本晃司、2015、『家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆』、OECD、ベネッセ教育総合研究所  
OECD/無藤隆・秋田喜代美監訳、2018、『社会情動的スキル 学びに向かう力』、明石書店  
H.ガードナー/星三和子(訳)、1996、『子どもの描画 なぐり描きから芸術まで』、誠信書房  
橋本忠和、2019、「幼児の社会情動的スキルを育む「ごっこ遊び」の造形表現活動についての一考察 3歳児の「魚釣りに行こう」での活動分析を通して」、『美術教育学研究』、pp.265-272.  
東北芸術工科大学創造性開発研究センター、2017、『2016年度東北芸術工科大学創造性開発研究センター活動報告書 ワークショップのたね』、東北芸術工科大学創造性開発研究センター。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林俊介	4. 巻 51
2. 論文標題 子どもの製作活動における発話と非認知的能力の活性化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 169-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19008/uaesj.51.169	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊藤香, 高橋美紀, 井上七緒, 武田夏実, 工藤美月, 佐藤美咲, 張崎正裕, 石沢恵理, 小林俊介
2. 発表標題 造形・製作活動が育む力 -遊びの質と創造性, 社会的・行動的スキル-
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小林俊介, 石沢恵理, 笠原広一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山形大学小林俊介研究室	5. 総ページ数 68
3. 書名 子どもの製作活動における発話と非認知的能力の発達に関する研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------